

高校球児による野球留学の現状と問題点の考察

A discussion of the problems associated with crossing prefectural boundaries to play high school baseball

1K03B072-4 久笠 真奈

指導教員 主査 リー・トンプソン 先生 副査 吉永武史 先生

【序論】

2006年夏に行なわれた第88回全国高校野球選手権大会は、37年ぶりの再決勝や、早稲田実業の斉藤祐樹投手と駒大苫小牧の田中将大投手の投げ合いなどで例年以上の盛り上がりを見せた。しかし、2005年夏に行なわれた第87回全国高校野球選手権大会はグラウンド外の出来事で人々に大きな衝撃を与えた。開幕直前に明德義塾の部内暴力が発覚、大会出場を辞退したことに始まり、優勝校の駒大苫小牧でも以前から指導者による暴力が行なわれていたことが大会終了後に発覚したのである。この大会の開会式で当時の文部科学大臣であった中山成彬氏が述べた挨拶は、高校野球の地域密着を奨励し、野球留学を批判しているともとれる内容であった。

本論文では野球留学の現状と問題点の分析・考察を行う。

【第1章】

選抜高等学校野球大会（春の大会）と全国高等学校野球選手権大会（夏の大会）の歴史や、出場校の選出基準、試合形式、硬式野球部の現状などを分析する。

高野連が2006年7月に発表した調査によると、全国の硬式野球部員数は9年連続の増加となる16万6314人で過去最多となった。

春の大会は1都道府県につき最大2校、夏の大会は北海道と東京を除き、加盟校数に関係なく1府県1校と定められている。しかし、全国的にも激戦区として知られる地域と、加盟校数が全国で一番少ない地域とでは約170校もの差がある。このことが過剰な野球留学を促す一つの要因になっているのではないかと考え、次章でその現状と問題点を詳しく考察する。

【第2章】

野球留学の定義を確認し、その現状と問題点について考察する。

高野連が2005年10月17日に発表した調査によると、第87回全国選手権地方大会に参加した全4137校のうち、登録選手に県外中学出身者が含まれた高校は647校であった。割合で見ると、県外中学出身者の割合は全国平均が3%であることに對し、本大会出場49校の平均は21.2%であった。また、後日発表された追加資料によると、過去

10年間で全国選手権大会に出場した県外中学出身選手916人のうち、約半数の457人を大阪府出身者が占めていることがわかった。その理由として、大阪が他地域に比べてリトルリーグ、シニアリーグが非常に盛んであること、加盟校が205校もあるため、甲子園大会への予選試合数が多いことなどが考えられる。

野球留学には、早い時期から整った環境の中で良い指導を受けられるメリットの裏に、親元を離れて暮らすことによる生活の乱れの危険性なども孕んでいる。このことから、野球留学と部内不祥事が全く無関係であるとは言い切れないであろう。

【第3章】

プロ野球とJリーグ、高校野球の理念を比較し、それぞれが目指すべき道を考察する。

Jリーグやプロ野球球団のオリックス・バファローズでは、理念として地域密着を唱え、その実現のためにさまざまな社会活動を行なっている。高校野球でもしばしば地域密着が強調されているが、日本学生野球憲章によれば、高校野球の理念は学生野球の健全な発達である。第2章で述べた通り、さまざまなデメリットも孕む過剰な野球留学は、学生野球の健全な発達を促すとは考えにくい。

【第4章】

強豪校で甲子園大会に出場するために野球留学を経験した人物にインタビューを行なった。野球留学には否定的な意見が少なくないが、経験者からするとデメリットよりメリットのほうが大きく、インタビュー前の予想に反して野球留学に対する批判的な発言はほとんど出てこなかった。

【第5章】

早い段階から良い環境の中、良い指導者のもとで野球をしたいという学生の希望は尊重されるべきであり、進路の選択は個人の自由である。しかし、高校野球の理念が学生野球の健全な発達である以上、それを侵す過剰な野球留学は肯定されるべきではない。一概に野球留学を否定し規制するのではなく、入学前の本人の意思確認の徹底や入学後の指導の改善が今後の大きな課題となるであろう。